



新春対談 幸せな農村をつくりたい



舞鶴市長 多々見良三



農業者 霜尾共造

西方寺平で農業を営む霜尾共造さん(36歳)。進学で舞鶴を離れるも、平成14年11月にUターン就農。養鶏業や有機栽培農業を営む傍ら、実行委員長として岡田中まつりを企画するなど地域活動を牽引する若手のリーダーとして多方面で活躍中です。昨年、「京都府若手農林漁業者表彰」を受けられました。その霜尾さんと多々見市長が、農業や地域への思いなどを語り合いました。



市長 今回の対談は私の方から霜尾さんを指名させていただきました。岡田中まつりのときに地元の先輩の皆さんと関わっておられる中で、リーダーとして動いておられる姿を見てすごく感銘を受けました。そういうエネルギーはどこから来るのかというのが、最初に興味を持った理由です。

霜尾さん(以下敬称略) 地域の方に育ててもらったところが大きいと思います。僕は西方寺平という山の中で育って、その中で地域のおじさんやおばさんにごくかわいがってもらって、昔の遊びを教えてもらったり、行事のたびに遊んでもらったり。そういう積み重ねが今につながっているのだと思います。

市長 若者が農業から離れようとする中で、以前私が霜尾さんに「地域に戻り農業を引く継ぐきっかけは何ですか?」とお聞きしたら、「子どものときに親からこの西方寺平が『緑の大都会だ』と聞いて育ってきました」と。「みんなは田舎を不便だと言うけど、自分は都会を不便だ」と

農地を守るためではなく、住む人が幸せになるために農村がある



て聞いても「さあ、それもよく分からない」って(笑)。この前来ていた子なんか、春休みに実家に帰ったらお父さんがいなくて、夏休みに帰ったらまたいなくて、お母さんになんでいないのって聞いたら、昨年から熊本に出張しているって(笑)。

市長 地方の過疎化、地方創生などと言われていますが、若い人たちが地方に戻らせる方法って何かありますか?

霜尾 外へ出る前も重要だと思います。例えば昔あった「まち遊びフェスティバル」。何か一つの目的に向かって、舞鶴の



多様な人々が住める農村が、豊かで理想的

市長 同感です。私は、若者にもっともつとめと農業や漁業に就いてほしいと思っています。そういう中で機械化や中規模化、法人化をして、週一日の休みがとれて一定の月給が確保できるという目標を指せば、農業をやるうかなくなっていく人が増えるのではないかと思います。霜尾さん、どうお考えですか?

霜尾 僕は休みがほしいとは思っていません(笑)。でも、年収を確保したいというのは共通した思いだと思います。休みというよりは、多くの人が生業として生活